『鶴川くんの恩返し』

濱 幸那

一学期もそろそろ終わりを迎えるという、ちょうど梅雨も明け、蒸し暑い日が続くようになってきた頃。

私、小鳥遊真矢夏は気になる男子を見つけた。ちなみに、好きで気になる、というような乙女の心ではないのが、私の悲しいところである。私のクラス、四年三組にいる、鶴川君という、まあ特に特徴のない眼鏡の男子のことなのだ。身長は、クラスの平均よりも少し高いか低いかで、髪はこざっぱりした普通の男子という感じ。眼鏡だって普通の、黒いフレームで、七色ではない。服だって、特になにかあるわけでもない。真面目なんだとわかる程度で、他の男子と大差はない。

それでも一つだけ、鶴川君には他の子と違うところがあった。彼はずつと、折り紙を折っているのだ。

新学期が始まり、親睦を深めようとみんながする中、たった一人で、特に楽しそうにするわけでもなく、ただ黙々と紙を折っていたのを見て、それが、私にはひどく印象に残った。

この前も、授業中に机の下でこそ何かしていると思ったら、なにかよくわからないものを折っていて、私は授業にあまり集中できなかった。何を折っていたのか気になって、休み時間に直接彼に訊いてみたら、彼は短く、「ペガサス」とだけ呟いて、それっきり。その後は、開けた窓から部屋に入ってくる、校庭で遊ぶ子達の声と、柔らかな風の音しか聞こえない。そのまま話が終わってしまうのは、なんだか嫌で、その後もじつとペガサスを眺めていたら、視線を感じたのか、いつものように、無表情な顔で私を一瞥した。そして、鶴川君は、「ペガサス、あげようか？」と、丁度今出来上がったペガサスを、差し出してくれたのである。

思いもしなかった、まさに棚から牡丹餅に、「いいの!？」と顔を輝かせた私に、彼はそっぽを向いて「別に」と一言。その顔は夏でもないのに、やけに赤かったような気がする。

その日はそれだけだったけれど、また次の日も、その次の日も、折り紙ばかり折っているものだから、私は不思議に思っ、訊いたのだ。

「どうして、ずっと折り紙を折ってるの？他にも、楽しい事いっぱいあるよ？」

そう言う鶴川君は、少しだけ私の方を見て、またファイ、と視線をそらし、折り紙の世界に戻って行ってしまった。

そこから少しの間、沈黙が続いた。もしかして、自分の言動が何か、癪に障るようなことがあったらどうか、と不安になった私は、その時、ちょうど顔を上げた鶴川君と目が合って、びっくりしてしまった。無視したと思ったのに。

「折り紙は言葉だから。」

さつきまで目も合わせなかったくせに、やけに真っ直ぐと見つめてきて、思わず固まってしまった。

それからは、何事もなかったかのように自分の世界へと戻り、もう私は蚊帳かやの外。そこには、彼の、鶴川君の世界しか広がっていない。

呆気にとられた私は、それから、いつものようにつまらない授業中も、待ちに待った給食の時間も、小二の頃からの親友である夕夏に話しかけられた時も、走って帰る下校中もずっと、その事で頭がいっぱいだった。

家に帰ってきた後、無造作にランドセルを放り、私は手も洗わずにソファに寝転がる。

近くにあつたりリモコンで、適当にニュースをつけながら、脳内でぐるぐるとあの言葉を考える。

そもそも、折り紙は折って、楽しむものだ。言葉なんかじゃないと思う。

言葉は口で相手に伝えるものだけど、折り紙はー。

そこまで考えて、丁度番組が面白いところになったため、私は一旦テレビに集中することにした。

それでも、頭の奥に、鶴川君の言った言葉がこびりついて、離れなかった。そして、いつの間にか私は寝てしまっていたらしい。

ふと目を覚ますと、目の前には眩しい部屋の照明があった。ブランケットがかけていたもので、どうやらお母さんが返ってきたことが分かった。

ぐつぐつと台所の鍋の音や、水道から出る水の音を、私は目を閉じながら聞く。心地よさに、また眠気が襲ってきたとき丁度、

「真矢夏、ご飯できてるから早くして。ほら、スプーンと食器持ってって。」

とお母さんから声がかかり、さらに、カレーの食欲をそそる匂いが漂ってきたため、私は「うん」と返事をして、寝起きで少し重たい体を起こした。

「……………ねえ、お母さん、折り紙って、言葉なの？」

目をごしごし擦り、同時にスプーンでカレーをもぐもぐと食べ進めながら、私は唐突に告げる。

お母さんは驚いたような顔をした後、呆れたような声を出す。

「そんなわけないでしょ。誰に言われたのよ。」

「クラスの折り紙少年に。」

さらに大馬鹿者を見るような目を、無言で向けられた。

私も無言で見つめ返す。決して母親への不満を表そう、というわけではなく、ただ単にまだ眠く、意識がぼんやりとしていたからである。

「何、ソファで寝てたときに、おかしな夢でも見たの？」

私は沈黙を守って、お母さんの言葉を無視した。これはわざとである。

いちいち揚げ足を取るような事を言う人は、嫌われるって先生、言ってたよ。そう心の中で訴えながら、私はテレビのお笑い番組に集中した。

「テレビ見ながらカレー食べると落とすわよ」とお母さんに言われ、私の食欲は失せた。どうして、いちいちそんなことばかり言うんだろう。イライラする。

後で、仕事から帰ってきたお父さんにも訊いてみたけど、やっぱり良い答えは得られなかった。

二時間以上寝てしまったという事もあってか、その日はよく眠れなかった。

翌朝、私は目をこすりながら朝食のパンを食べ、とぼとぼと玄関に向かうと、お母さんが心配そうな顔をしていた。

いつもより沈んだ声で、「いってきます」と言い、外に出ると、外のまだ少し冷たい空気を肌を感じ、少しだけ目は覚めた。でも、それでも眠い。少しでも油断すると、重い瞼が落ちてしまう。絶対に、寝てしまう。

そして、朝のうちに鶴川君に訊いておこうと思ったのに、登校してから朝礼まで、自席で爆睡してしまったため、彼と話すことさえできなかった。

授業中、眠い頭でぼーっと、黒板を眺めていた時に先生に指名されても、私には「わかりません」と叫ぶしかない。

隣の席で、夕夏がげらげら笑っていて、なんだか不服だった。

鶴川君に、せめて放課後、折り紙について訊いてみようと思っていたのに、私は今日、自分が掃除当番であったことを思い出したため、終礼が終わっても話しかけることは出来なかった。

なんとか頑張って掃除を終わらせようと努めたが、終わった後、もちろん鶴川君の席に鶴川君はいなかった。

雨も降り始めたようで、窓に水滴が滴っている。外はすでに薄暗く、朝の曇り空よりも、もっと暗くなっていた。

なんとなく憂鬱な気分で、とぼとぼと階段を下り、昇降口のところで外靴に履き替える。予備でランドセルに入れていた折り畳み傘を取り出し、外に出ると、湿気でじめじめした空気が、肌にはりつくようで、どうにも気持ち悪い。

顔を顰めながら歩いていると、校門で、どこかで見たような後ろ姿の男子が雨宿りしているのに気づいた。

私ははっと息をのんだ後、その男子に話しかけた。

「鶴川君？何してるの。」

少しの沈黙の後、雨空を眺めたまま、鶴川君は「雨宿り」と答えた。

違う、そんなことは分かっている。

「どうしてそんなところにいるの？」

またしても沈黙が降り注ぐ。数秒無言になった後、鶴川君は、なんてことのないように言葉を発した。

「傘を忘れちゃったんだ。だから、雨が止むまで待つつもり。」

そう言った後、一瞬だけ私と目が合ったが、またすぐにフイと逸らされてしまった。鶴川君ともあろう人が傘を忘れるなんて、と思ったけれど、まあ、別に彼は完璧と言わけてはいないし、とも考え、若干の違和感が残るものの、「じゃあ、一緒に帰ろう」と提案した。

「多分同じ方面だろうし、送るよ。」

本当は逆方面だった。彼が前に下校していた時、ちょうど逆方面だったのを偶然見て、自分が少しだけ残念に思ったことを、覚えていた。

鶴川君は初め、驚いたように目を瞠みはっていたが、私が二回繰り返し言うと、渋々と言った様子で「ありがとう」と言った。

そうして、二人で話す時間を得ることに成功したわけだが、肝心の折り紙の話題にはなかなか切り出せず、二人とも無言のまま五分ほど歩いた。

どう切り出そうかと悩んでいた時、鶴川君が唐突に、

「……じゃあ、ここで。」

と言った。鶴川君は、ある家の前で止まり、「今日はありがとう」とだけ言って、家の中に入って行ってしまふ。

私は内心酷く焦っていたが、どうすればいいかわからず、「また明日ね」とだけ言って、またとぼとぼと家に帰った。

家に帰ると、お母さんが「雨、大丈夫だった？」と訊いてきたけれど、私は俯うつむいたまま頷くしかなかった。

今日も、なかなか寝付けなかった。

翌朝、私は意を決し、今日こそは鶴川君に訊こう、と息巻いていた。

いつもよりも早く学校に行き、いつもよりも早く席に着いて、鶴川君が来るのを待つ。

私の登校時間がそれなりに遅いことを知っている夕夏は、今日私が早いことに気がつき、目の下の隈に驚きながら、「今日は早いね」と言う。私は、にっこりと笑顔で返した。

十分後、他の子達もぞろぞろと登校し始めた時間に、鶴川君が来た。

けど、勢いよく立ち上がり、話しかけようとした私よりも前に、鶴川君に話しかけた男子がいた。確か、授業中によくゲームをして怒られている、松本か松田だ。

「鶴川、昨日は傘、貸してくれてありがとう!!」

残念がりながらも、一旦席に戻ろうと思った私は、その言葉を耳にした途端、静止した。

フリーズ、とでも言うべきだろうか。

男子が更に「おかげで塾に間に合ったよ!あの後雨酷くなってたけど、大丈夫だったか?」と訊き、鶴川君はいつものようにそっけなく、「全然、大丈夫だよ」と答えて

いる。

確か昨日、鶴川君は傘を忘れてしまったと、そう言っていたのにー。昨日感じた違和感には理由があった。

几帳面な彼が、予備の傘を忘れるわけがない。ひよっとすると、朝、天気予報だった、確認していたかもしれない。

私は、自分が鶴川君と一緒に帰らず、あのまま先に帰ってしまったと思ったら、と考えて、少し怖くなった。

ああ、鶴川君は本当に寛容で、本当に優しいんだな、と実感する。

そんなことを考えていた時、鶴川君とぼつちり目が合い、気まずそうに視線を逸らされてしまったが、私はそんなこと、気にしていなかった。

ただ胸が、少しだけ温かくなったように思えた。

勇気を出して、今日の昼休みに彼のもとに行った。待ちきれなかった。

今日は晴れていて、水たまりも乾いていたから、みんなは校庭や屋上で遊んでいる。教室には少数の子達しかいない。

「鶴川君」と呼びかけると、いつものように折り紙を折ろうとしていた彼は、今日はさして驚いたような表情を見せずに、私の方を向いた。

「折り紙は言葉、って、どういう意味なの？」

本当は昨日訊きたかったんだけど、と続けながら、私は鶴川君を見る。

鶴川君は少し考えてようやくやく合点がいったらしく、折り紙を折り始めながら「ああ、あれね」と答えた。

そしていつものように、少しの沈黙が流れる。元気に鳴く蝉の音が、五月蠅い。私はじつと、彼が答えてくれるのを待ちながら、彼の手元の折り紙を眺める。

「……………僕は、あんまり人に伝えるの、得意じゃないんだ。」

「えっ」と、私が思わず漏らした言葉を気に留めるわけでもなく、彼は話す。

「でもさ、そういうのって、どうしようもないんだよ。改善しようと思つて、できるものでもないわけだし。だから、」

そこで一回手を止めて、ふっと息を吐いた後、彼は言った。

「折り紙を折って、人にそれを渡して、感謝を伝えるんだ。そうしてみたら、みんな、笑顔でありがとうって、逆に感謝してくれた。それがすごくうれしかったんだよ。」

私は啞然としながら、こういう子を、「達観している」というのだろうか、と思つた。

「だから、折り紙って、言葉に似てるよな、って思つて。」

そう言つて、鶴川君は気恥ずかしそうに、少しだけ笑う。照れ隠しなのだろう。

私は、まだ頭でよく理解できていなかった。けれど。

オリガミハコトバ。オリガミハコトバ。

それを今はじめて、私は自分の中にすんなりと、受け入れられたような気がした。

『折り紙は、言葉』。

今までは、唯ただの紙にしか思えなかった折り紙が、きらきらと輝いているように思えた。唯の紙きれ、なんかじゃなかった。

その一つ一つには、心が詰まっている。鶴川君の優しい心が。

私だって、折り紙くらい折ったことあるし、気軽に折れて便利なんだろうな、くらいにしか、彼のことを考えたことがなかった。

私は、そんなに考えて折り紙を折ったことがない。たいていの子が、そうだろう。思ったことはすぐ口に出して言う。相手の気持ちなんて知らない。

そういう自分勝手に我儘な気持ちしか、私にはなかった。

私と鶴川君は、全然違う。

同じ小学四年生とは思えない考えをしている鶴川君は、今、彼の世界を広げているに違いない。

それは、自分一人で世界を広げているように見えるのに、彼は、自分だけでなく他の誰かの為にも、紙を折っているんだ。

「……蚊帳の外じゃ、なかった。」

ポツリと呟いた言葉に、「えっ」と言った彼を、私は真っ直ぐ見つめた。

彼の目は、一点の曇りのない綺麗な目をしていた。

今だって彼には、彼の中には、澄みきった綺麗な世界が展開されているのだろう。私もその世界を、見てみたい。共有したい。

「ねえ、それ何を折ってるの？」

突然言った言葉に戸惑いながらも、「鶴だけど」と言った彼に、私は笑いかけた。

「私にも折り方、教えてよ。」

夏休み明け、鶴川君は転校した。誰にも知らせず、唐突に。

私はどこか寂しさを覚えながらも、それでも、悲しくはなかった。

何もかもが透き通ってしまいうようなほど、笑えて来るほど、空は青かった。